

福島市松川地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 水稻・大豆による大規模稲作経営体として、経営の安定を目指す。
- 大豆の単収の向上を目指す。
- 収量及び加工適性に優れた「里のほほえみ」の導入を図る。



2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】水稻：44.0ha、大豆：8.2ha（R3）
- 【作付けされている大豆の主な品種】
里のほほえみ：0.0ha、タチナガハ：5.0ha、その他：3.2ha 計8.2ha（R3）
里のほほえみ：2.5ha、タチナガハ：2.5ha、その他：3.9ha 計8.9ha（R7）



3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<福島地域畑作物生産振興支援チームによる大豆栽培の普及推進>

- 福島市、川俣町、JA、地域農業再生協議会及び普及部からなる支援チーム員会議を定期的で開催し、関係機関との連携を密にしながら、個別巡回による栽培支援等を行う。

<実証ほの設置及び現地指導会の開催>

- 小畝立て同時播種技術の導入により生育初期の湿害を回避するとともに、形質の劣化が懸念される「タチナガハ」（慣行栽培）から「里のほほえみ」への栽培品種の転換に取り組む。
- 「里のほほえみ」の豆腐加工適性を検証する。
- 実証ほで得られた結果を現地指導会で周知し、管内全域に波及させる。



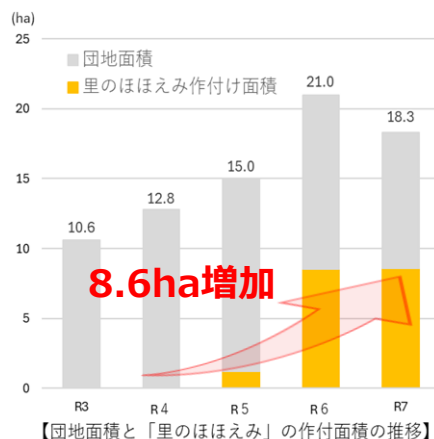
4 取組成果

<栽培技術の定着による収量向上>

- 現地指導会や個別巡回による指導により、小畝立て播種技術の定着に加え、開花期の畦間灌水が普及し、単収が向上した。
単収：81kg/10a（R3～6平均）→101kg/10a（R7）
等級比率：3等79%、特定加工用合格21%（R3）
→1等7%、特定加工用合格93%（R7）

<「里のほほえみ」の作付割合の増加>

- チーム員会議で情報共有しながら、「里のほほえみ」への栽培品種の転換を推進した結果、モデル地区を含め、管内の「里のほほえみ」の作付面積が増加した。
団地面積：10.6ha（R3）→18.3ha（R7）
「里のほほえみ」作付面積：0.0ha（R3）→8.6ha（R7）



5 残された課題

- 高温年において、「タチナガハ」は青立ちが発生しやすい傾向がみられており、引き続き「里のほほえみ」への栽培品種の転換を図る必要がある。
- 開花期に高温・乾燥が予想される場合は、着莢不良や青立ちを回避するために、畝間灌水の実施について指導する必要がある。
- 加工業者が「里のほほえみ」を使用した豆腐の加工に慣れていないため、「里のほほえみ」の加工適性を検討する必要がある。